

保育系学生のキャリア選択プロセスとそれにかかわる要因

The factor which concerns a carrier choice process of the Nursery Student

生田 恵津子 高下 梓
Etsuko IKUTA Azusa TAKASHITA

要旨

本研究は、保育者を目指す学生が、保育所実習をどのように捉え、入学時からすべての実習が終了するまでの間のキャリア選択プロセスを把握し、そこに介在する要因を検討することを目的とした。

学生のほとんどは保育士・幼稚園教諭等を目指して入学するが、卒業までにキャリア選択が変化する学生が少なからず存在した。強い内発的動機づけにより保育者を志望した学生ほどその後の進路にも迷いがなく、外発的動機づけに基づいて入学した学生は、キャリア選択に迷いが生じたり、他職種を目指したりする傾向がみられた。学生の資質や実習経験による影響が示唆されるとともに、学生がよりよいキャリア選択に向けて学習するためには、実習時期をはじめ、事前事後指導、他科目の教授内容、実習園との協働が課題と考えられた。

【キーワード】 保育所実習 キャリア選択 志望動機 保育者

I はじめに

厚生労働省（2018）の全国調査結果によると、希望しても保育所などに入れない待機児童数は長野県で50人に上った。大都市圏で問題になっていた待機児童問題は、地方都市に広がり2018年4月1日時点で松本市が43人、安曇野市が7人と、県内でも増加し始めており、施設整備や保育士の確保が課題になっている。

保育士資格を取得しても保育士職に就く新卒者の割合が30%台まで落ち込み、さらに離職率の高さも問題となっている。

厚生労働省（2015）によると、2013年の全国保育士資格登録者数は118万6000人で、2006年の1.5倍となっている。それにもかかわらず保育士が不足するのは、資格取得をしても保育士職に就かない学生が増えていることに問題がある。保育ニーズは多様化し保育士の仕事も多様化する中で、保育士の社会的地位は決して高くない。処遇の改善が図られつつあるとはいえ他業種に比べ高いとは言えない。これらのことが保育士不足の要因とされている。

一方、これから保育者を目指す学生はどうであろうか。実習園で保育士と子どもとのかかわりに触れたり、自身が子どもたちと過ごした実習に心を惹かれて就職を考えている。保育士職に就きたいという思いを持って入学してくる学生のキャリア選択が卒業までの間に変容していく要因の一つは、学内での講義や実習の中にあると言えるのではないかという仮説のもとに、授業改善につなげるため昨年か

習の事後指導で保育実習生のための自己評価を行ってきた。

一方、保育者を目指す学生のキャリア選択のプロセスに関わる要因は、授業・実習以外にも1) 実習を重ねる中で保育士職へのモチベーションが変化する可能性や、2) 実習経験の捉え方の個人差というように、学生個々の性格や経験などの個人差が関係している可能性も想定される。

学生のキャリア選択のプロセスと、そこに至った学生の傾向を把握し、学生の個性や背景に応じた事前事後指導、授業、学生支援を行うことによって、早期の段階から学生の職業観を育て、よりよいキャリア選択につなげることができると思われる。

2. 目的

本研究では、保育者を目指す学生を対象として、1) 入学時からすべての実習が終了するまでの期間における保育実習の評価と、キャリア選択のプロセスを把握し、2) 性格や保育者になりたいというモチベーション等の個人差がキャリア選択の変化に介在している可能性を調べることを目的とした。

3. 方法

- 1) 調査対象者 2018年度の本学幼児保育学科2年生85名。
- 2) 調査時期および調査方法 2018年11月下旬に、無記名による自記式質問紙調査を実施した。
- 3) 調査内容 質問紙の構成は、性別、保育実習の

経験評価、保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲの選択理由、保育者を志望した時期と理由、入学から最後の実習の終了後までの複数の時期に考えていたキャリア選択、就職の内定状況、性格検査（柳井ら、1987）全130項目であった。

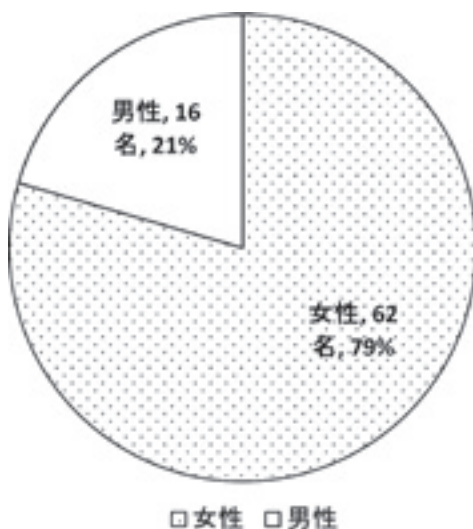
4) 分析方法 質問項目ごとの回答傾向を調べ、さらに保育者を志望した動機の程度や、在学中のキャリア選択の志望プロセスのタイプ別に、保育実習の捉え方や性格などの特徴を調べた。

5) 倫理的配慮 本研究は松本短期大学倫理委員会の審査を受け、承認された（承認番号：201802）。調査の実施にあたり、対象者へ書面と口頭による説明によって同意を得た。口頭説明では、1) 本研究への協力は自由意志かつ匿名性を配慮しており、成績評価等とは無関係であること、2) 調査への参加は途中で取りやめられること、3) 集計にあたっては統計的に処理するため個人が特定されることはないこと、4) 研究成果は発表・公表すること、を伝えて同意書を得てから調査を実施した。

4. 結果

調査対象者のうち78名（男性16名、女性62名）から回答が得られ、全ての調査用紙を分析対象とした（有効回答率100.0%）。本学における保育実習Ⅰの実習時期は、履修学生を約半数に分けて、1年次2月および2年次8月に保育所・施設をそれぞれ1回ずつ実習している。今回の回答者のうち42名（53.85%）は、保育所を1年次2月、施設を2年次8月に実施し、36名（46.15%）が施設を1年次2月、保育所を2年次8月に実施した。

図1 回答者の性別の内訳（N = 78）



1) 保育実習Ⅰの経験

1回目の保育所実習における「職員との人間関係」「子どもとの関わり」「実習記録」「指導計画の作成」の負担の度合いの回答結果を、表1に示した。「指導計画の作成」以外の3項目は、すべての学生が実習を通して体験していた。「職員との人間関係」と「子どもとの関わり」の負担の度合いは「それほど大変ではなかった」という回答が最も多く4割以上を占めていた。「大変ではなかった」「それほど大変ではなかった」を合わせると、「職員との人間関係」「実習記録」は6割以上の学生が、「子どもとの関わり」は8割以上の学生が負担を感じていなかった。これに対して、「実習記録」は「大変だった」に回答のピークがあり、「とても大変だった」「大変だった」を合わせると8割以上の学生が負担を感じていたことが分かった。「指導計画の作成」は、体験の有無が実習先によって異なっていたが、体験した52名の回答のピークは「大変だった」にあるものの、選択肢の回答率はいずれも1割以上であり、他の項目に比べて学生の感じ方にばらつきがあったことが窺えた。

保育所実習の時期によって負担の度合いに違いがあるかマンホイットニーのU検定を行ったところ、「実習記録」において1年次2月の実習生の方が負担を感じていた傾向がみられた（ $p < .10$ ）が、それ以外の有意差はみられなかった。

2) 保育実習Ⅱの経験

保育実習Ⅰの終了後、保育実習Ⅱ（保育所）を選択した学生は35名（44.87%）、保育実習Ⅲ（施設）を選んだ学生は40名（51.28%）、保育士資格取得を諦め、その後の実習を選択しなかった学生は3名（3.85%）であった。保育実習Ⅱを選んだ学生の実習の負担度は表2のとおりであった。「職員との人間関係」の回答傾向は保育実習Ⅰとほぼ同様で、回答のピークは「それほど大変ではなかった」で4割以上の学生が選択していた。「子どもとの関わり」は「大変ではなかった」に5割以上が回答し、次いで「それほど大変ではなかった」「大変だった」が続いていた。「実習記録」の回答は保育実習Ⅰとほぼ同様の分布であった。「指導計画の作成」は、実習生全員が経験し、5割以上の学生が「大変だった」と回答し、次いで3割弱の学生が「とても大変だった」と答えていた。

保育実習Ⅱと保育実習Ⅲに関する選択理由を尋ねた（表3）。選択した実習先による理由の傾向には有意差はなく、「働きたい領域での経験を積みたかった」が選択の動機として最も強かった。

表1 保育実習Ⅰ（保育所）の負担の度合い（ $N=77$ ）

| | 職員との人間関係 | | 子どもとの関わり | | 実習記録 | | 指導計画の作成 | |
|--------------|----------|-------|----------|-------|------|-------|---------|-------|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| とても大変だった | 6 | 7.79 | 2 | 2.60 | 24 | 31.17 | 11 | 14.29 |
| 大変だった | 20 | 25.97 | 11 | 14.29 | 38 | 49.35 | 17 | 22.08 |
| それほど大変ではなかった | 33 | 42.86 | 37 | 48.05 | 11 | 14.29 | 11 | 14.29 |
| 大変ではなかった | 18 | 23.38 | 27 | 35.06 | 4 | 5.19 | 13 | 16.88 |
| 経験しなかった | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 25 | 32.47 |

表2 保育実習Ⅱ（保育所）の負担の度合い（ $N=34$ ）

| | 職員との人間関係 | | 子どもとの関わり | | 実習記録 | | 指導計画の作成 | |
|--------------|----------|-------|----------|-------|------|-------|---------|-------|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| とても大変だった | 2 | 5.88 | 1 | 2.94 | 9 | 26.47 | 10 | 29.41 |
| 大変だった | 6 | 17.65 | 5 | 14.71 | 17 | 50.00 | 19 | 55.88 |
| それほど大変ではなかった | 15 | 44.12 | 10 | 29.41 | 5 | 14.71 | 4 | 11.76 |
| 大変ではなかった | 11 | 32.35 | 18 | 52.94 | 3 | 8.82 | 1 | 2.94 |
| 経験しなかった | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 |

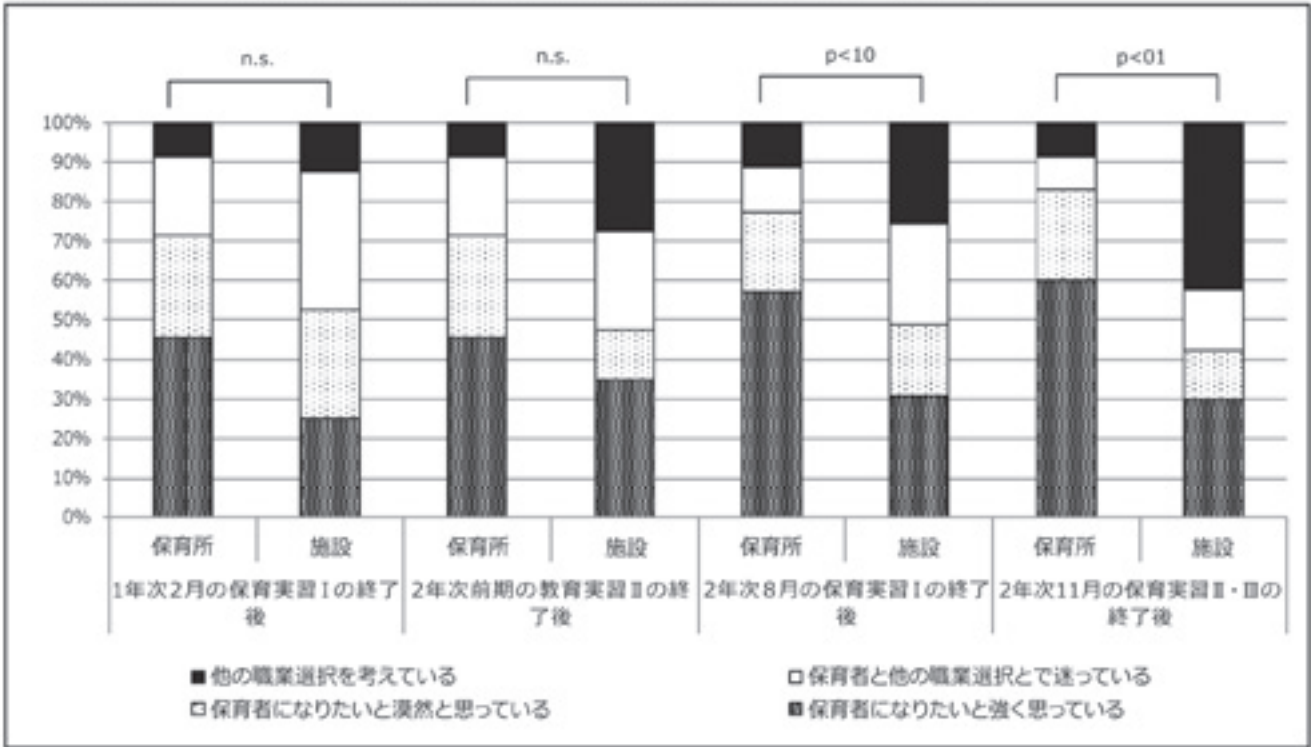
表3 保育実習Ⅱと保育実習Ⅲを選択した際の理由（ $N=77$ ）

| | N | まったくそう 思わない | | あまりそう 思わない | | まあそう思う | | とてもそう思う | |
|-------------------------------------|----|----------------|-------|---------------|-------|--------|-------|---------|-------|
| | | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 就職先の希望や、内定先を選んだ | 73 | 22 | 30.14 | 10 | 13.70 | 20 | 27.40 | 21 | 28.77 |
| 1回目の保育実習と同じ実習先でさらに経験を積みたかった | 73 | 31 | 42.47 | 18 | 24.66 | 7 | 9.59 | 17 | 23.29 |
| 働きたい領域での経験を積みたかった | 74 | 7 | 9.46 | 7 | 9.46 | 18 | 24.32 | 42 | 56.76 |
| 働きたい領域ではないが、関連領域の現場について学生時代に経験したかった | 74 | 33 | 44.59 | 16 | 21.62 | 16 | 21.62 | 9 | 12.16 |
| 保育所と施設とで、実習課題の難易度を比べて、簡単そうな方を選んだ | 74 | 50 | 67.57 | 8 | 10.81 | 10 | 13.51 | 6 | 8.11 |
| 保育所と施設とで、実習課題の難易度を比べて、難しそうな方を選んだ | 74 | 43 | 58.11 | 18 | 24.32 | 8 | 10.81 | 5 | 6.76 |
| 保育士資格の取得を目的に、実習の単位を取りたかった | 73 | 12 | 16.44 | 5 | 6.85 | 24 | 32.88 | 32 | 43.84 |

保育実習Ⅱと保育実習Ⅲのどちらを選択するかを決める時期は、本学では2年生前期にあたる。そこで、この前後の時期に「保育者になりたい」「他

職種を考えている」等のキャリア選択をどのように考えていたかについて、実際の実習選択先別に調べた（図1）。

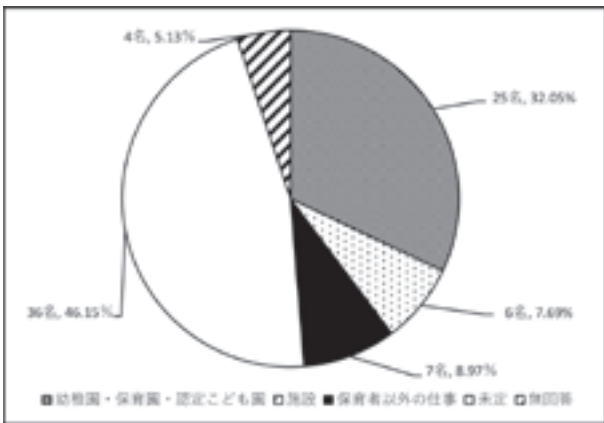
図1 保育実習Ⅱ・Ⅲの選択時期の前後におけるキャリア志向（実習選択別）（N=75）



3) 就職先

調査時点における就職先の内定状況を図2に示した。約半数は就職活動中のため、最終的な就職先が保育者に関連するのか、それ以外なのか判別できなかった。就職先が決定した38名のうち25名(65.79%)は保育士・幼稚園教諭・保育教諭として、6名(15.79%)は施設における保育士として内定し、7名(18.42%)は保育者以外の他職種への就職であった。

図2 就職の内定状況の内訳 (N=78)



次に、保育者を志望した動機の高さと就職先との関連を調べた。保育者を志望した理由のうち「自分が幼稚園・保育園でお世話になった保育者にあこがれたから」「保育の職場体験やボランティアを通して魅力を感じたから」「子どもが好きだから」「子ども

と関わる仕事がしたいと思ったから」の4つを内発的動機づけと関連する理由とみなし、これら4項目の合計点の上位・下位25%で区切り、回答者を「高群」「中群」「低群」に分けた。

内定先が決まった38名のうち、保育士資格または幼稚園教諭二種免許を用いた職種に就く学生31名の動機の群別の内訳は、「高群」(11名, 35.48%)、「中群」(14名, 45.16%)、「低群」(6名, 19.35%)であった。就職先未定の学生36名においては、「高群」(10名, 27.78%)、「中群」(15名, 41.67%)、「低群」(11名, 30.56%)であった。カイ二乗検定を行った結果、調査時点での内定の有無と、保育者志望の動機タイプとの間には有意差はみられなかった ($X^2 = 1.186, df = 2$)。

4) 保育者のキャリア選択のプロセス

「保育者になりたい」と思った時期について尋ねたところ、高校生時代に志望した学生が約半数を占め(44.16%)、次いで中学生(24.68%)、小学生(16.88%)と続いてきたが、幼少期から「保育者になりたい」と思っていた学生も1割以上いた(14.29%)。

入学時から2年生秋の最後の実習終了時までを8時期に分けて、時期ごとの就職の志望先を尋ねた(図3)。「保育者になりたいと強く思っている」学生の割合は、入学時には6割以上いたが、1年生2月の保育実習Ⅰの終了後にかけて徐々に少なくな

り、2年生秋の最後の実習にかけて再び徐々に増えていた。「保育者になりたいと漠然とと思っている」学生は、入学時に3割弱存在し、1年生夏休みの保育体験の終了後にかけて4割弱まで増えたのち、徐々に減る傾向がみられた。「保育者以外の職業選択で迷っている」学生は、1年生2月の保育実習Ⅰの終了後にかけて割合が急激に増えて3割弱に達し、その後減少していた。「他の職業選択を考えている」学生は、入学時には1割に満たなかったが、

1年生2月の保育実習Ⅰの終了後から徐々に増え始め、2年生前期の教育実習Ⅰの終了時点でそれまでの約2倍になり、2年生秋の最後の保育実習の終了時点で3割弱に増えていた。

保育者を志望した理由を複数挙げて、それぞれの程度を尋ねた結果について、全体の平均値と2年生秋の最後の保育実習が終了した時点でのキャリア選択別の平均値を表4に示した。

図3 在学期間中（8時期）におけるキャリア選択の意志（全体）（N=78）

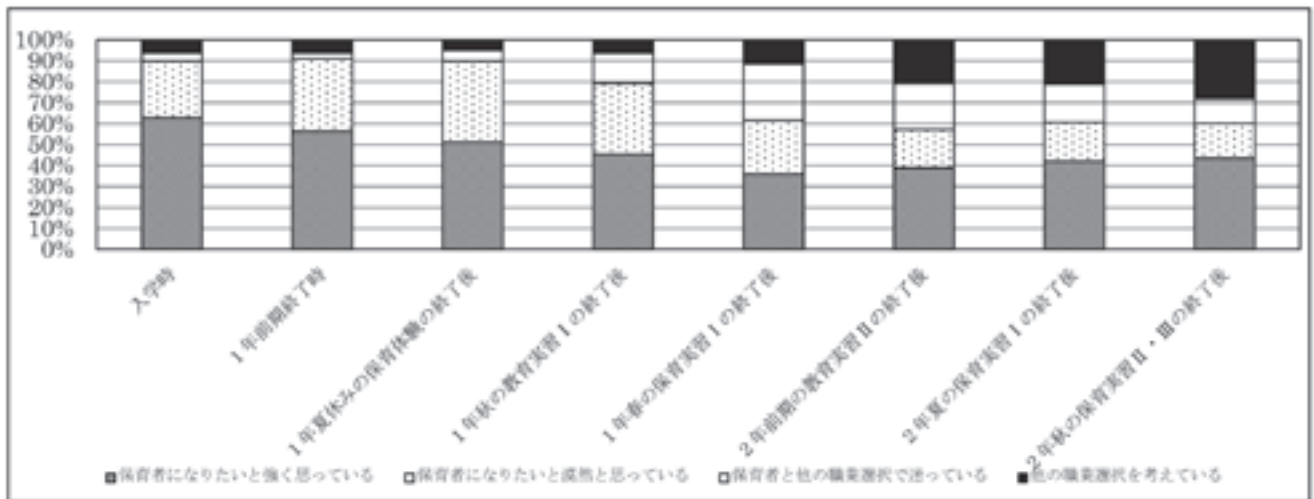


表4 保育者の志望理由の程度（2年生時点におけるキャリア選択の意志別）

| | 保育者になりたいと強く思っている (N=34) | 保育者になりたいと漠然とと思っている (N=13) | 他の職業選択と迷っている (N=9) | 他の職業選択を考えている (N=22) | 全体 |
|-------------------------------------|----------------------------|------------------------------|-----------------------|------------------------|------|
| 自分が幼稚園・保育園でお世話になった保育者にあこがれたから | 3.03 | 2.69 | 2.89 | 2.55 | 2.82 |
| 家族や親戚など身近に保育者がいて、自分もなりたと思ったから | 1.62 | 1.54 | 2.22 | 1.68 | 1.69 |
| 年下の子どもの世話をするのが好きだったから | 3.50 | 3.46 | 3.22 | 3.05 | 3.33 |
| 昔、子どもの世話をした時に褒められ、自分に向いているのではと思ったから | 2.41 | 2.31 | 2.78 | 2.45 | 2.45 |
| 保育の職場体験やボランティアを通して魅力を感じたから | 3.38 | 3.08 | 2.44 | 2.55 | 2.99 |
| テレビやインターネットなどの情報を通じて、魅力を感じたから | 1.94 | 1.69 | 2.11 | 1.68 | 1.85 |
| 自分の得意なことを活かせると思ったから | 3.24 | 2.46 | 2.89 | 2.50 | 2.86 |
| 子どもが好きだから | 3.97 | 3.85 | 3.89 | 3.36 | 3.77 |
| 子どもと関わる仕事がしたいと思ったから | 3.82 | 3.69 | 3.67 | 2.86 | 3.51 |
| 親に勧められたから | 1.79 | 1.77 | 1.67 | 2.27 | 1.91 |
| 教師に勧められたから | 1.68 | 1.46 | 1.56 | 1.77 | 1.65 |
| 友人から刺激を受けたから | 1.53 | 1.31 | 1.78 | 1.50 | 1.51 |
| 就職に有利だと思ったから | 1.68 | 1.77 | 2.00 | 1.95 | 1.81 |
| 就職につながる資格を取りたいと思ったから | 2.82 | 2.00 | 2.78 | 2.36 | 2.55 |
| 高校で進路を決める時期に、なりたいたものにまだ迷っていたから | 1.56 | 2.08 | 1.89 | 2.00 | 1.81 |

全体として「子どもが好きだから」「子どもと関わる仕事がしたいから」「年下の子どもの世話をするのが好きだったから」への回答率が多く、これらの理由においてはキャリア選択の群に関わらず回答の平均点が高かった。

「保育者になりたいと強く思っている」学生は、「自分が幼稚園・保育園でお世話になった保育者にあこがれたから」「保育の職場体験やボランティアを通して魅力を感じたから」「自分の得意なことを活かせると思ったから」「子どもが好きだから」「子どもと関わる仕事がしたいと思ったから」の回答への平均点が他の群に比べて最も高かった。「保育者になりたいと漠然と思っている」学生は、「高校で進路を決める時期に、なりたいたいものにまだ迷っていたから」の平均点が最も高かったほかは、それぞれの理由に対する目立った傾向は見いだせなかった。「他の職業選択と迷っている」学生は、「家族や親戚など身近に保育者がいて、自分もなりたいたと思ったから」「昔、子どもの世話をした時に褒められ、自分に向いているのではと思ったから」「テレビやインターネットなどの情報を通じて、魅力を感じたから」「友人から刺激を受けたから」「就職に有利だと思ったから」の回答の平均点が他の群に比べて最も

高かった。「他の職業選択を考えている」学生は、「親に勧められたから」「教師に勧められたから」の回答の平均点が他の群に比べて最も高かった。

2年秋の保育実習終了時点でキャリア選択と、その意志が固まった時期を調べた(表5)。「保育者になりたい」と強く思っている学生のうち半数は、入学時からその意思が揺らぎずに志望し続けていた。また、1年次の初めての実習(教育実習Ⅰ)以降の、それぞれの実習終了後に「保育者になりたい」という強い志望意志を持つようになった学生がコンスタントに数名ずつ増えていた。「保育者になりたいと漠然と思っている」学生は、入学時から漠然としているという状況が変わらない者が3名いる一方で、約半数は他の志望選択との間で揺らぎながら、実習経験の終盤の時点において「保育者になりたいと漠然と思っている」という状況に至っていた。「保育者」と他の職業選択で迷っている」学生は、いずれも1年夏休みの保育体験以降の各時点で他の職業選択と迷うようになっていた。「他の職業選択を考えている」学生は、入学当初から2名いたが、9割は1年生秋の教育実習Ⅰの終了後から保育職以外の職業選択を考えるようになっていた。

表5 キャリア選択の最終意志の決定時期と選択タイプ別の割合 (N=76)

| 最終的なキャリア選択の意志が決まった時期 | 保育者になりたいと強く思っている | | 保育者になりたいと漠然と思っている | | 保育者その他の職業選択で迷っている | | 他の職業選択を考えている | |
|----------------------|------------------|-------|-------------------|-------|-------------------|-------|--------------|-------|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 入学時 | 16 | 48.48 | 3 | 23.08 | 0 | 0.00 | 2 | 10.00 |
| 1年次 前期終了時 | 2 | 6.06 | 1 | 7.69 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 |
| 1年次 夏休みの保育体験の終了後 | 0 | 0.00 | 1 | 7.69 | 1 | 10.00 | 0 | 0.00 |
| 1年次 秋の教育実習Ⅰの終了後 | 3 | 9.09 | 0 | 0 | 4 | 40.00 | 2 | 10.00 |
| 1年次 2月の保育実習Ⅰの終了後 | 2 | 6.06 | 1 | 7.69 | 2 | 20.00 | 3 | 15.00 |
| 2年次 前期の教育実習Ⅱの終了後 | 3 | 9.09 | 1 | 7.69 | 0 | 0.00 | 5 | 25.00 |
| 2年次 8月の保育実習Ⅰの終了後 | 5 | 15.15 | 4 | 30.77 | 2 | 2.00 | 3 | 15.00 |
| 2年次 秋の保育実習Ⅱ・Ⅲの終了後 | 2 | 6.06 | 2 | 15.38 | 1 | 1.00 | 5 | 25.00 |
| 合計 | 33 | | 13 | | 10 | | 20 | |

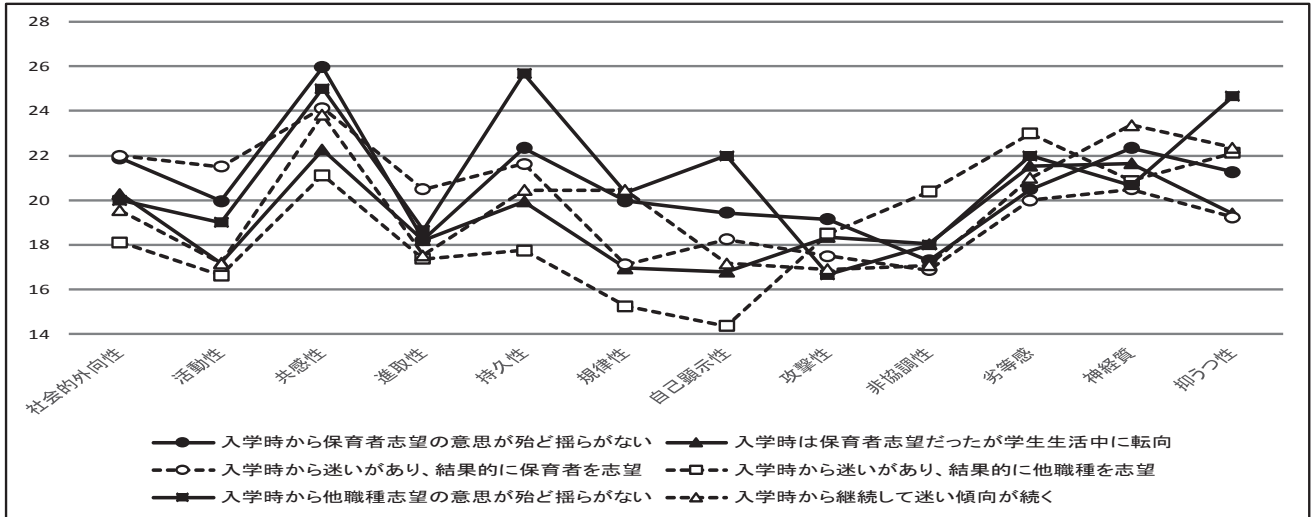
次に、入学時から8つの時期におけるキャリア選択のプロセスによるタイプ分けを試みた。無回答のあった2名を除く76名を対象として分類した結果、「入学時から保育志望の意志が殆ど揺るがない」26名、「入学時は保育志望だったが学生生活中に転向」20名、「入学時から迷いがあり、結果的に保育者を志望」8名、「入学時から迷いがあり、結果的に他職種を志望」8名、「入学時から他職種志望の意志が殆ど揺るがない」3名、「入学時から迷い傾向が続く」11名の6つのタイプに分かれた。このキャリア選択プロセスのタイプ別に新性格検査(柳井・柏木・国生, 1987)の下位尺度の平均点のプ

ロフィールを算出した(図4)。タイプによっては人数が少ないため、統計的な検討は行わなかったが、「入学時から保育志望の意志が殆ど揺るがない」学生と「入学時から他職種志望の意志が殆ど揺るがない」学生においては「共感性」「持久性」「自己顕示性」の平均点が他のタイプに比べて最も高かった。加えて、「入学時から他職種志望の意志が殆ど揺るがない」学生においては「抑うつ性」の平均点も最も高かった。「入学時から迷いがあり、結果的に保育者を志望」した学生は、「社会的外向性」「活動性」「進取性」の平均点が最も高く、「非協調性」「劣等感」「神経質」「抑うつ性」の平均点が最も低かった。「入

学時から迷いがあり、結果的に他職種を志望した学生は、「非協調性」「劣等感」の平均点が他のタイプに比べて最も高く、「社会的外向性」「活動性」「共感性」「進取性」「持久性」「規律性」「自己顕示性」と多くの下位尺度において平均点が最も低かった。

「入学時から迷い傾向が続く」学生においては、「神経質」「規律性」の平均点が他のタイプに比べて最も高く、他の下位尺度の多くは中庸で、「活動性」「進取性」「攻撃性」の平均点は低い傾向がみられた。

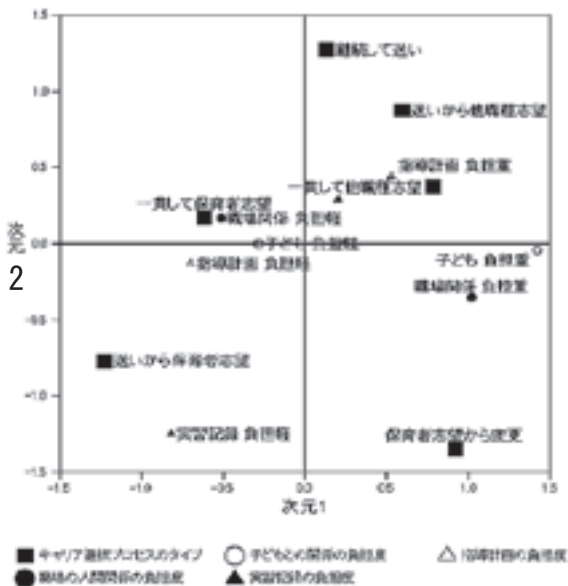
図4 キャリア選択のプロセスタイプ別の新性格検査の平均点プロフィール (N=76)



キャリア選択のプロセスの6タイプと、保育実習 I（保育所）の負担の度合いとの関連性をみるためにコレスポネンス分析を行った（図5）。一貫して保育者を志望している学生は、職場の人間関係や子どもとの関係、指導計画の作成への負担を感じておらず、迷ったのちに保育者を志望した者も負担をそれほど感じていない傾向がみられた。一方、一貫して他職種を志望する学生や、迷ったのちに他職

種を選択した者、保育志望から他職種へ変更した者は、一般的に実習時の諸課題に対して負担感を覚えやすい傾向にあることが窺えた。実習の負担度合いの軽重との関連は、一貫して保育者になりたいという意思が強い者ほど負担と感じにくく、一貫して他職種を志望する意志の強い者ほど負担感が強い傾向が顕著であった。

図5 キャリア選択プロセスタイプと保育実習 I における負担の度合いの関連 (N=77)



内発的動機づけのタイプ別に、在学期間中（8 時期）のキャリア選択の様相を調べた（図6～図8）。内発的動機づけ「低群」は入学時から「保育者になりたいと漠然と考えている」「他の職業選択を考えている」の割合が高く、次第に増加し、最後の保育実習終了後には「他の職業選択を考えている」が5割に達していた。「中群」の6割強は入学時に「保育者になりたいと強く思っている」が、「保育者になりたいと漠然と思っている」者が次第に増え、最終的には半数が「保育者になりたいと漠然と思っている」「保育者と他職業選択とで迷っている」「他の職業選択を考えている」のいずれかとなっていた。「高群」においては、入学時に9割以上が「保育者になりたいと強く思っている」で、1年次2月の保育実習後に落ち込むものの最終的に7割へ回復していた。

図6 在学期間中（8時期）におけるキャリア選択の意志（内発的動機づけ：低群）（N=9）

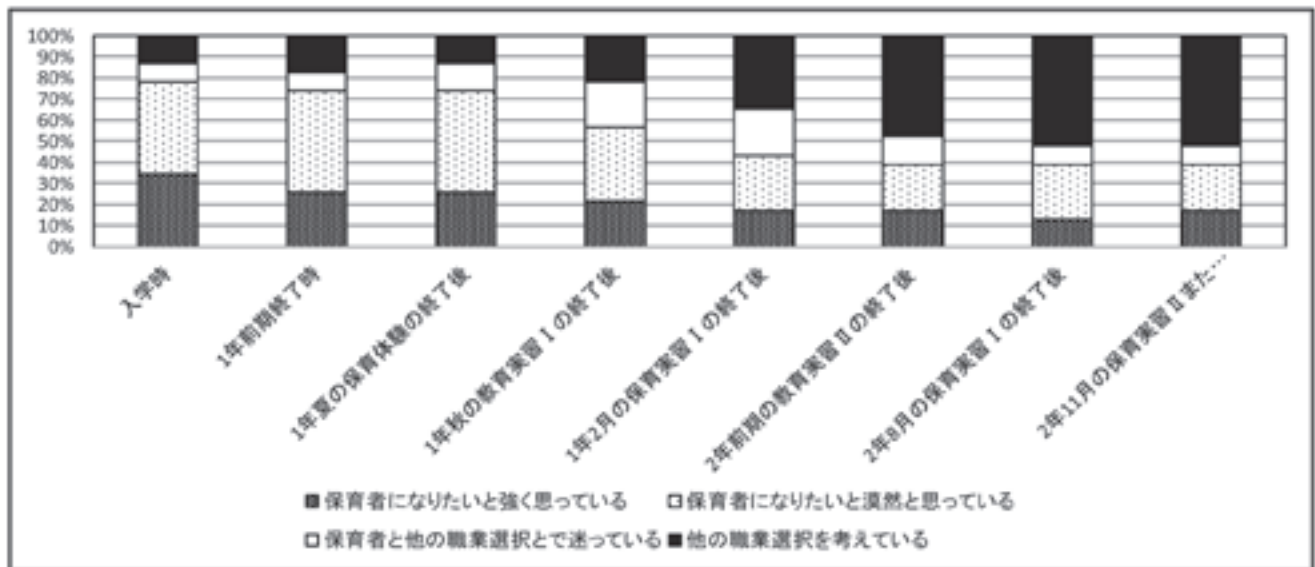


図7 在学期間中（8時期）におけるキャリア選択の意志（内発的動機づけ：中群）（N=17）

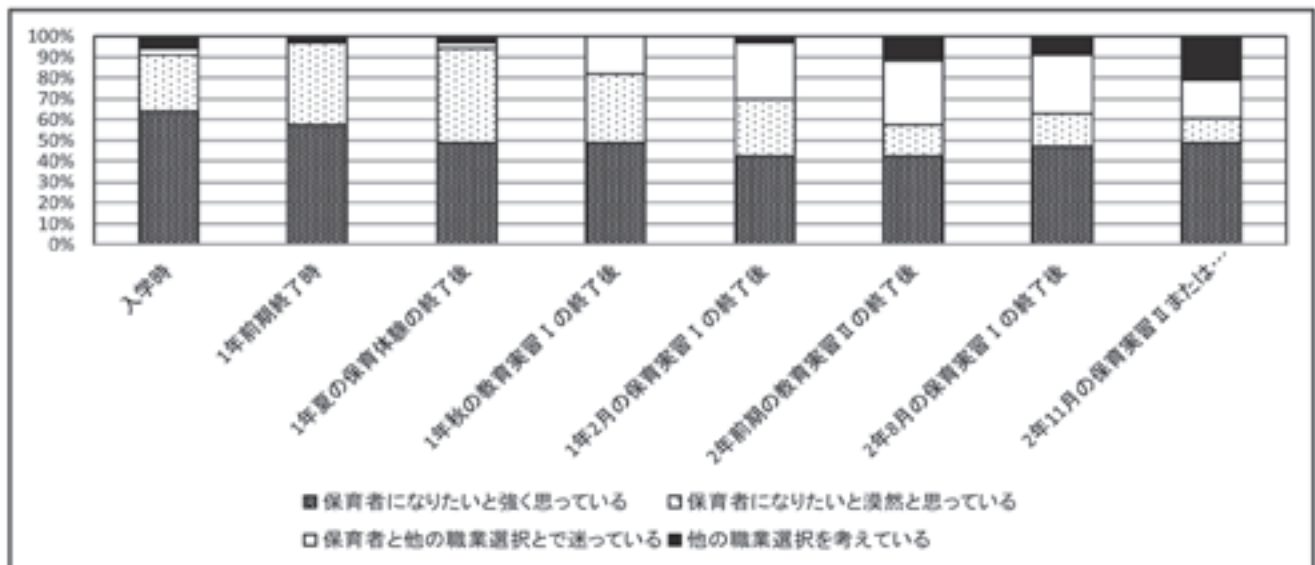
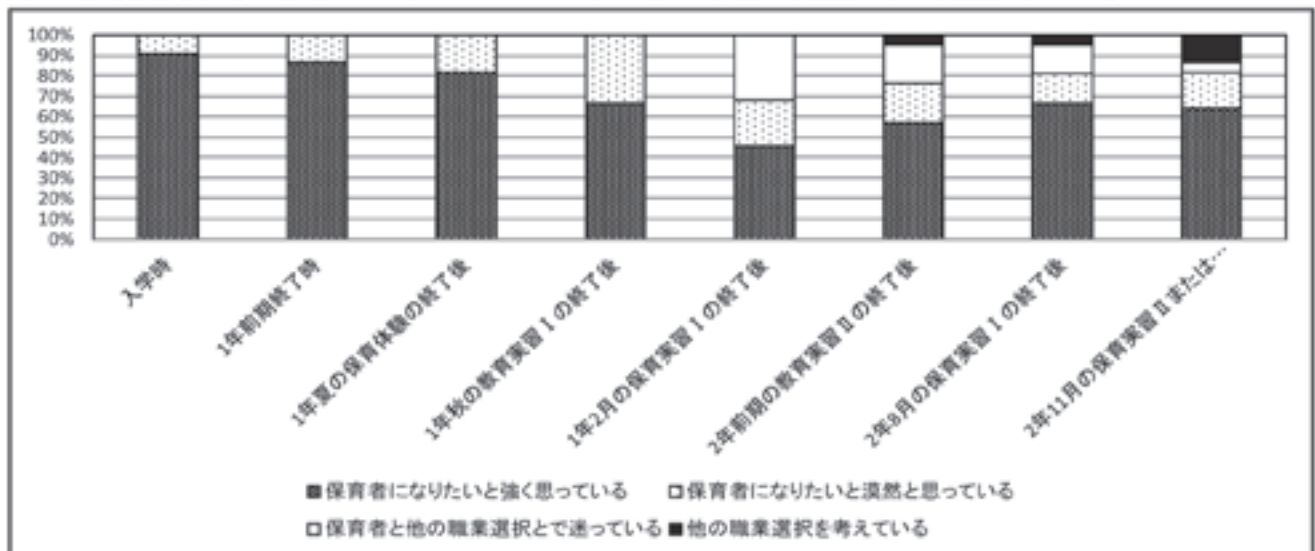


図8 在学期間中（8時期）におけるキャリア選択の意志（内発的動機づけ：高群）（N=12）



5. 考察

1) 保育実習Ⅰの経験を分析した結果から

保育実習Ⅰは保育所実習と施設実習から成り、1学年全員が一度に実施することが困難なため、1年次と2年次に分けて実施していることから、保育所実習を1年次2月に経験する学生と、2年次8月に経験する学生に分かれる。受け入れ側(保育所)の理解にも差があり、保育実習Ⅰなので観察実習を主に部分実習をさせる園もあれば、2年生だからということで指導計画の作成や一日実習を実習計画に入れる園もあり、実習先によって体験できることが違うため、アンケートの分析では保育実習を1年次に体験した学生と2年次に体験した学生で結果に違いが見られたのは「指導計画の作成」項目であった。「職員との人間関係」に半数以上の学生が負担を感じたということは、今の学生は家族や同世代の友人達に限られる狭い人間関係の中で生活しているからであろうと考える。大変だったこととして8割以上が「実習記録」を上げている。子どもとの関わりは想像の範囲であったが、実習記録の大変さは想像以上であったことが窺える。今の学生は「書く」ということ自体の経験が少ないため1年次に保育所実習Ⅰをした学生の方が2年次に保育所実習Ⅰをした学生に比べ実習記録の負担感が大きかったのであろうと思われる。

2) 保育実習Ⅱの経験を分析した結果から

保育実習Ⅱ(保育所)か保育実習Ⅲ(施設)は選択である。2年次教育実習Ⅱが終わってからの時期に選択するが、例年保育実習Ⅱを選択する学生は7割近い。しかし今年度は44.87%と例年になく少なかった。これは、図3と図4から、選択時期に保育士職を目指す気持ちが強い学生ほど保育実習Ⅱを選んだが、それほどでもないという学生は保育実習Ⅲを選択したことがわかる。保育実習Ⅱでは、実習記録に加えて、指導計画の作成が学生の負担となっている。このことから、事前指導で指導計画の作成に充てる時間をもっと確保する必要があることがわかる。実習指導だけでなく、他の教科目の中でもその分野に関わる指導計画の作成を、積極的に取り入れていく必要があると感じる。

3) 就職先について

調査時(2年次11月末)は、約半数が就職活動中であったため、この時期の就職内定状況からは、志望動機タイプによる有意差はみとめられなかった。志望動機と就職先との関係性をハッキリ捉えられればほとんどの就職が決まる2月頃の調査が必要になる。今回の調査においては「内定状況

を問うたが、就職先未定の状態の中では、「就職希望先」として尋ねることで学生それぞれの就職志望先を確認することができたかもしれない。

4) 保育者のキャリア選択のプロセスについて

入学時から2年次秋の最後の実習までを8時期に分けて、「保育者になりたい」という思いの変化を調べた結果、入学時に強い思いを持って入学してきた学生は6割を超えるが、2月の保育実習Ⅰで減っていた。しかし、2年次6月の教育実習を終えたころから少しずつ意欲は回復していた。この時期は早い自治体では1次試験が始まる。就職に向けて保育士職への意欲が回復すると思われる。しかし、本学ではこの段階で施設か保育所かどちらかの実習しか経験できないため、後期履修科目の保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲを決めることは学生にとって大変困難で、1年次に保育所実習をした学生の方が、2年次の保育実習Ⅱを履修する割合が少ない。つまり保育士や幼稚園教諭への道を考えるかどうかは、1年次の保育所実習にかなりの重さがあると言える。その点では、2月の保育所実習の有り様を実習受け入れ園にお任せするのではなく、養成校としての姿勢を積極的に伝え、協働の道を作っていくことが求められる。また、事前指導では、模擬保育などを通して、より具体的な授業の展開が必要であると考え。表5からは、保育者を志望した動機がわかる。自身に強い内発的動機がないところで、高校の進路指導の先生から勧められた、保護者の希望などで入学してくる学生にはこの強い内発的動機がないため、職業選択を他職種に決める傾向がある。つまり、入試の時に幼児保育学科への志望動機を尋ねることだけでは、掴みきれないのが「気持ち」であると言える。

引用文献・参考文献

- 厚生労働省(2015) 保育士等に関する検討資料(第3回保育士等確保対策検討会 参考資料1)
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/s.1_3.pdf
- 厚生労働省(2018)「保育所等関連状況取りまとめ(平成30年4月1日)」を公表します
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000350592.pdf>
- 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子(1987)プロマックス回転法による新性格検査の作成について(1), 心理学研究, 58, pp.158-165.